

相模原市立博物館

前編

一九九五年十一月に歴史系、自然科学系の両分野にわたる総合博物館としてオープン。活動方針も、その器となる建築も「市民に開かれた博物館」が目指された。前編は、自然環境を最大限に生かし、市民に親しまれる建物が設計された経緯を紹介する。



博物館前面のオープンスペース。ガラス張りのファサードの手前に雑木と下草が育っている。塀などはなく、ヒューマンスケールの小径がアプローチに向かう。

戦後史を背景に持つ
雑木林に建てられた博物館

相模原市立博物館が建っている一帯は、雑木林に恵まれ、市の総合計画に「緑と文化のシンボルゾーン」と位置づけられている地域だ。戦後、米軍が居留地として使用していた「キャンプ淵野辺」が一九七四年に返還され、約六六畝の広大な跡地に、国の研究施設や、市立の小中学校、県立高校、公園などがつくられた。

博物館はとりわけ緑の濃い、跡地の東側のエリアに位置する。返還後一〇年以上手つかずのまま時間が過ぎ、樹木が自然に育っていたからだ。八六年に東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館、八九年には宇宙科学研究所（JAXA・宇宙航空研究開発機構）が設立され、その近くに九五年、相模原市立博物館がオープンした。

市民に開かれた生涯学習の
場のあり方を追求

相模原市に博物館設立の構想が生まれたのは一九八〇年代の初めだった。市民グループが郷土の自然と文化を守り育てる場として要望し、それを受けて市の基本構想がつくられたが、敷地利用が可能になるまで予想外の時間がかかり、準備期間は一五年弱にわたった。その間に練られた建設基本計画が固まり、具体化に向けて動き出したのは九〇年頃だという。

当時、公共博物館のあり方は変化しつつあった。資料の収集、保存、研究、展示といった基本活動に加えて、市民が参加して運営される博物館が求められるようになった。市の営繕課（当時）で建設担当を務めた村山靖之氏が振り返る。「基本計画の中で強く意識されていたのは、名実ともに『市民に開かれた博物館』をつくることでした。施設の要件にもそれが反映され、例えば、あって当然に思われる学芸員室が計画にはありませんでした。設けられたのは「市民研究室」だった。市民が自由に出入りして学べる研究室をつくり、そこに考古や歴史、自然など専門

分野の学芸員の座席が同居するという柔軟な考え方である。棚の資料を閲覧することもできるし、アロイスを求めることもできる。学芸員と市民の距離を縮め、親しまれる環境をつくることが目指されていた。

雑木林の四季を感じながら
森の中を歩くように館内を巡る

建築にも基本計画の意図が生かされ、質の高い施設をつくるために、プロポーザルコンペが行われた。設計候補六社に提案を求め、選ばれたのは建築家・戸尾任宏氏が率いる「建築研究所アーキヴィジョン」の設計案だった。



1階のエントランスホール。オープンスペースの雑木林が館内から見渡せる。受付周辺にはトップライトから自然光が落ちる。



竣工当時の俯瞰。現在も良好な自然環境は変わらず、博物館の背後から西側にかけては国の留保地のまま、雑木が密に繁っている。（提供：相模原市立博物館）



1階エントランスホールの正面に設けられた中庭。相模原の雑木林を眺めて楽しむことができる。植えられているのは、クヌギ、コナラなどの落葉樹、下草など。

ダムに生い茂る木立の間に見え隠れしながら、透明なガラスのファサードが立ちあがっている。囲いや塀のような仕切りもなく、歩道から館の入口までのびる小径をたどると、大きなガラスを通して内部の清々しい雰囲気を感じられ、興味が自然に館内へと向いていく。今では、二つの中庭に植えられたコナラ、クヌギやヤマザクラなどの落葉樹が大きく育ち、空に向か

って枝を広げている。自然のたたくまいを天井などが妨げないよう、設計はきわめて繊細だ。天井高さは四二・一メートル、柱の上端は天井パネルの間へ差し込むことで、あたかも木が貫通しているように見える。また、中庭周辺の柱の本数が少なく、太さにも配慮されていることに気づかされる。そうした設計意図を可能にしたのは構造設計の第一人者・木村俊彦氏だった。さらに、トップライトが要所に設けられており、自然光が降り注ぐ光景も印象深い。光の調子が刻々と変化し、外にいるような感覚をいつそう大きくしている。

訪れる人の年齢層は実に幅広い。来館者数は開館以来微増を続け、年間一四万人に近づいているという。授業の一環として来館する小中学生や、市民の研究グループ、幼児をつれたママ友同士が館内を散歩する姿も見られる。博物館とJAXAの見学を一緒に楽しむコースもあり、県外から来る人も少なくない。活動内容の充実と、館の開放的な雰囲気が多くの人々を引きつけているのだろう。



上／1階常設展示スペース。勝坂式土器など、縄文中期の土器や土偶などを展示。ほかに、自然、天文といった分野の展示もある。
下／プラネタリウムの入口が設けられているロビーも、前面がガラス張り、オープンスペースの緑に彩られる。

「私たちがコンペで提案した設計コンセプトは『森の博物館』でした」。当時、アーキヴィジョンの設計主任だった本多豊氏（現・LAN代表）がコンセプトの発端を語ってくれた。「候補者が集まり、敷地を案内されたときのことです。雑木林の中に入ると木漏れ日が射して、すばらしい雰囲気でした。そこで歩きながら戸尾先生が『この森を残さなくてはいけないね』と、ぼそっとおっしゃったんです」。設計チームも思いを同じくし、都市の貴重な財産である森と、博物館の施設がともに市民にオープン

であるような環境づくりを設計の柱に据えた。しかし、建物に必要な面積に対して、敷地面積には十分な余裕がなかった。「そこで、建物前面のオープンスペースと、内部にも中庭を設けて雑木林を再現し、森の中をそぞろ歩くような空間をつくろうと考えました」と本多氏。建物全体の高さをエントランス側で低く抑え、奥に向かって徐々に高くして、人が入りやすく森の中に溶け込むようなつくりとした。

来年二〇周年を迎える博物館を訪ねると、自然環境になじんだ軽やかな姿が待ち受けていた。ラン

建築主より

建築のあり方を考える
きっかけとなったプロジェクトでした



相模原市企画財政局 財務部
公共建築課 参事(兼)課長
村山靖之
Yasuyuki Murayama

一九九〇年に営繕課の建築職員として、市立博物館を担当しました。すでに建設基本計画がまとまっており、プロジェクトを具体化する段階です。設計者をコンペ方式で選ぶことになっていましたが、それは市にとって初めての試みでした。当時は多くの自治体で、質の高い建物づくりを目指し、コンペが盛んに行われていましたから、相模原市は後発といっていました。いきなり公開コンペを行うには経験不足でしたので、プロポーザル方式を採用しました。

私自身も要綱づくりや、設計候補者を選ぶといった仕事は初めてで、過去一〇年を遡って全国の博物館の設計事例を雑誌や資料で調べ作業に没頭しました。そのおかげで、個人的には本物の建築とはどのようなものか、考えるきっかけにもなりました。

審査委員は日本大学の近江榮先生、東京工芸大学の奥平耕造先生、明治大学刑事博物館(当時)の神崎彰利先生(後の初代館長)、そして庁内委員による合計六名でした。博物館といえば一般に重厚なイメージがあるなかで、当時としては軽やかな印象の設計案が選ばれました。竣工後、一般の人からどう思われているのか気になっていましたが、一年たつて新聞に開館記念記事が載った時、明るく親しみやすいという市民の反響を読みました。大変うれしく、市の選択は正解だったと思います。その思いは今も変わっていません。

設計者より

自然と建築の関わり方を意識する
スタートラインになりました

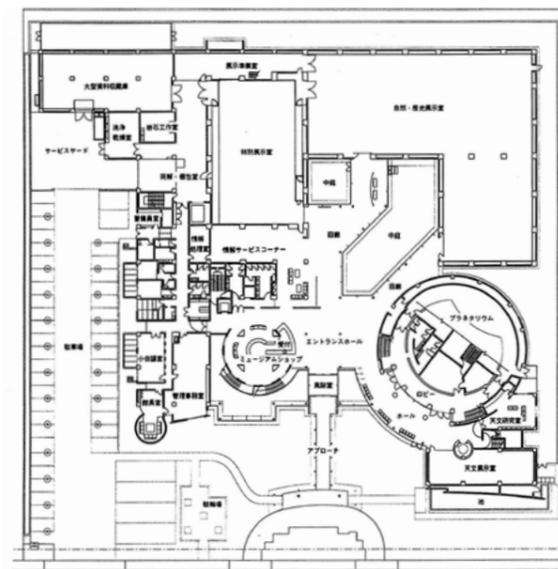


株式会社LAN代表取締役
本多豊
Yutaka Honda

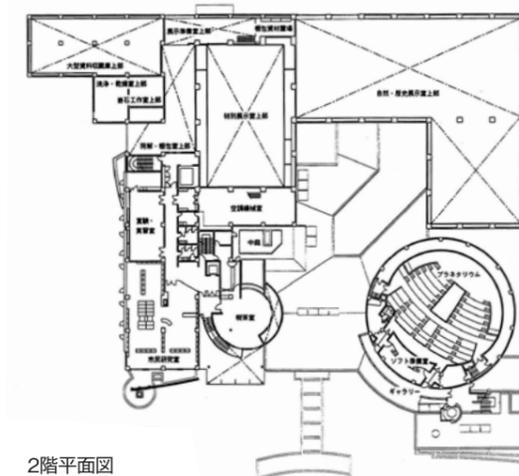
中庭をつくる途中でうれしいことがありました。植物の学芸員の方が「ここも自然展示のひとつになりますね」とおっしゃって、単なる庭ではなく展示という見方をしてくださった。植えた木々は雑木林として育ち、鳥もやってくるし、ドングリも実ります。博物館にふさわしく、四季の変化が身近に感じられる場になりました。このプロジェクトをきっかけに、私は自然を強く意識するようになりました。その後、伝統的な木造で博物館を設計する機会もあり、建

材の問題にも目が向くようになりました。さらに健康問題や環境問題を意識するようになり、サステナブルな自然素材を使った建築について考えるスタートラインになったのです。

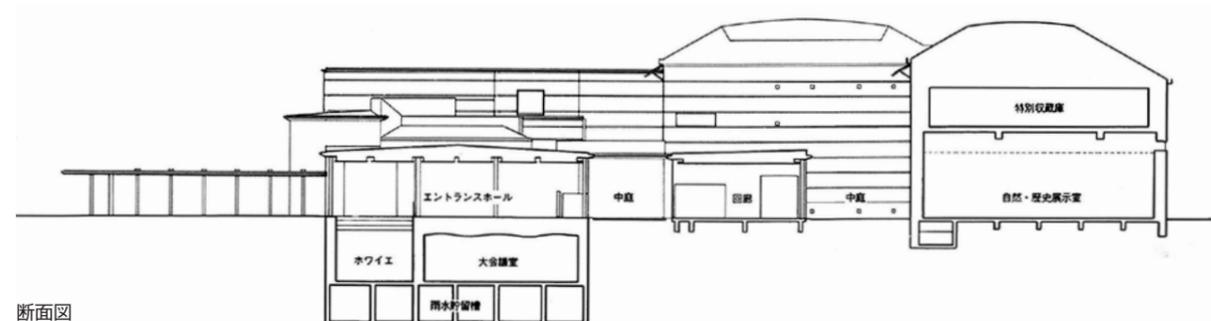
相模原市立博物館の設計は、曲線を使ったり、天井のさまざまな箇所にトップライトを設けたり、かなり複雑なデザインをしています。貴重な資料を守り、保存するといった博物館に欠かせない機能も必要です。それらをまとめ、実現することができたのは、部材の開発に力を貸して下さったメーカーや、三井建設(現・三井住友建設)をはじめとする施工会社の技術者の方々のおかげでした。私たちも、市の建築担当の村山さんも博物館の計画を進めてこられた学芸員の方もそれぞれに知恵を出して、いいものをつくらうという気持ちで共有していたことが記憶に蘇ります。



1階平面図



2階平面図



断面図

相模原市博物館

JR淵野辺駅南口から徒歩20分
 淵野辺駅南口(2番乗り場)から神奈中バス青葉循環で「市立博物館前」下車すぐ



計画概要

所在地：神奈川県相模原市中央区高根3-1-15
 建築主：相模原市
 設計者：株式会社建築研究所アーキヴィジョン
 施工者：三井建設株式会社、勝村建設株式会社、株式会社松尾工務店
 竣工：1995年7月
 敷地面積：9,999.48㎡
 建築面積：5,081.03㎡
 延床面積：9,510.24㎡
 構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造
 規模：地下1階、地上3階